【講演録】

英国・アイルランド文学とパンデミック

――ペストとスペイン風邪を中心に――

伊東裕起*

キーワード：英文学、アイルランド文学、ペスト、スペイン風邪、公開講座

１．はじめに

人間が逃れられない宿命の「四苦」（生病老死）の一つに数えられるように、人間は病から逃れることはできません。しかし、人間は病を、特に疫病（感染症・伝染病）を忘れてしまいやすいという指摘があります。近代日本における「結核」などのように病がロマン化される場合もありますが、多くは忘れ去られてしまう傾向にあります。WHOの推計で死者4000万人以上の犠牲者を出した「スペイン風邪」（1918年インフルエンザ）を世界は奇妙にも忘れていました。日本の内務省の公式統計でも、この病は（内地だけで）38万8727人の命を奪った（現在の人口に換算すると、100万人前後が死亡したことになる）のですが、日本においてもその疫病の記憶は薄いでしょう。また、14世紀の欧州で7500万人～２億人の命を奪い、「疫病の王様」とされるペストさえも忘れられていたという事実をご存じでしょうか。ペストに「黒死病」の名がついたのは18世紀であり、本格的に研究が始まったのはなんと19世紀コレラの流行の際なのです。また、幕末の日本で猛威を振るい、江戸だけで約３万人死亡し、その後の攘夷運動にも影響を与えたコレラの記憶も薄れています。その記憶はアマビエを含む妖怪の流行や疫病除けとしての三峯神社信仰に名残を留めますが、しかしコレラそのものの記憶は薄れていると言えるでしょう。

では、なぜ人は病を、特に疫病を忘れるのでしょうか。自らがスペイン風邪（本講演では歴史用語としてこの語を用います）に罹患し、その後も後遺症に苦しんだヴァージニア・ウルフは、そのエッセイ「病むことについて」で、病を中心的なテーマとして扱っている文学が少ないという問題を論じています。彼女は言います。「病気が愛や戦いや嫉妬とともに、文学の主要テーマの一つにならないのは、たしかに奇妙なことに思われる[1]」。確かにウルフの言うように、病、特に疫病を扱った作品は多くありません。しかし、文学だからこそ保ちえた疫病の記憶があり、文学だからこそ伝えることができるものがあるのではないでしょうか。直接的に病を扱っていなくても、その作品の背景に病の記憶は眠ってはいないでしょうか。今回の講演では、ペストおよびスペイン風邪に焦点を当て、英国文学における病の記憶を探っていきます。取り上げる作品は講演の時間（と紙面）の都合上、ペストに関連してウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』（初演1595年前後）、スペイン風邪に関連してW. B. イェイツ「再臨」（執筆1919年、発表1920年）、その百年後に執筆・発表されたエ

＊　城西大学語学教育センター助教

1　ヴァージニア・ウルフ著，川本静子編訳（2020）『病むことについて（新装版）』みすず書房. 73－4.

マ・ドナヒュー『星のせいにして』（執筆2019年、発表2020年、翻訳2021年）の３作品となります。

２．ウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』

『ロミオとジュリエット』はウィリアム・シェイクスピアによって書かれ、1595年ごろ初演された劇であり、世界で最も有名なラブストーリーのひとつとも称されるものです。対立する２つの家の男女が恋に落ち、悲劇的な最期を遂げる物語として知られますが、実はこの作品の背景にはペストの記憶が存在しているのです。

ペストとはペスト菌によって感染する病であり、主にネズミノミによって媒介されます。また、ペスト菌に感染した動物の体液や患者からの飛沫によっても感染します。大きく分けて「腺ペスト」（ノミに刺された場所に関係したリンパ節にペスト菌が感染したもの。リンパ節が大きく腫れあがり、高熱や皮下出血で黒ずむ)、「敗血症型ペスト」（傷口から直接ペスト菌が入った場合。ショック症状としてリンパ節の症状なしで全身が黒ずむ)、「肺ペスト」（肺に直接ペスト菌が入った場合であり、重篤な肺炎となる）の３つに分けられますが、かつては腺ペストで致死率50～60％、肺ペストで致死率90％以上という恐ろしい病でした。14世紀の欧州でのパンデミックは7500万人～２億人の命を奪い、後に「黒死病」と呼ばれました。現在でも英語で “the plague”「あの疫病」と言えばペストを指す「疫病の王様」です。

ウィリアム・シェイクスピアが生きた時代（1564～1616年）は、ペストの流行が３度繰り返された時代でもありました（1563～64年、1592～93年、1603～11年)。彼が生まれた1564年には故郷ストラトフォード・アポン・エイボンで町民約2000人のうち237人死亡したとされます。また、その時代は演劇が人気であると同時に、激しくバッシングされた時代でもあります。当時は病と宗教的罪が結びついて理解されていて、演劇は罪と堕落の原因であると同時に疫病の原因であると見做されていました。ロンドンにおいて週に死者30人以上が出た場合は公演禁止とされ、劇作家と劇団の苦難の時代でもありました。シェイクスピアはこのような時代に活躍した劇作家なのです。

さて、ここで『ロミオとジュリエット』のおおまかなあらすじを確認しておきましょう。イタリアのヴェローナという街にモンタギュー家とキャピュレット家という対立する二つの家がありました。モンタギュー家の一人息子ロミオは友人とキャピュレット家の仮面舞踏会に出席し、そこでモンタギュー家の一人娘ジュリエットと出会います。二人は熱烈な恋に落ちますが、二人の家は対立している間柄です。修道士ロレンスは家同士の和解のため、二人を秘密裏に結婚させます。しかしロミオの親友マキューシオがキャピュレット家の人間に殺され、ロミオが仇を討ちます。ロミオは殺人罪により追放刑となり、ジュリエットは親戚と結婚させられることになってしまいます。ロミオ以外と結婚したくないジュリエットに、修道士ロレンスは仮死状態になる薬を使うことを提案します。これで親戚を欺けると彼女たちは思いましたが、とある理由によって連絡がうまくいかず、ジュリエットが死んだと思ったロミオは彼女の傍で自殺してしまいます。ジュリエットは薬が切れて目覚めますが、ロミオの後を追って自ら命を絶ちます。この劇はこのような流れの物語ですが、なぜ連絡がうまくいかなかったのでしょうか。

ロレンスの手紙がロミオに届かなかった原因、悲劇の直接的なきっかけは、連絡役の修道士がペス

トの感染疑いのために隔離されたからです。松岡和子の訳で、５幕２場を引用しましょう。

ジョン　実は、同門の修道僧を探し
　道連れになってもらおうといたしまして。
　ちょうど町の病人を見舞っているところを
　尋ね当てたのですが、町の検疫官に
　我々二人が伝染病患者の出た家にいたとの疑いをかけられ
　戸には封印をされ、一歩も外に出られなくなりました。
　そんな訳で足止めを食ってマントヴァへは行かずじまい。
ロレンス　では、私の手紙は誰がロミオに？
ジョン　届けることができずに――まだここに――
　そのうえ、こちらへお返ししようにも
　みな感染を怖がって使いの者も見つかりませんで。[2]

これが悲劇のひとつの原因です。もしペストのパンデミックがなければ連絡役は隔離されず、手紙はロミオのもとに届き、二人が命を落とすことはなかったでしょう。この戯曲におけるペストは舞台装置としての側面が強いのですが、それでもこの設定が観客に自然に受け入れられるほど、ペストは彼らにとって身近なものだったのでしょう。

さて、このシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』には、いわゆる元ネタが存在します。それは、『ロミウスとジュリエット』（1562年初版）という、アーサー・ブルック作の物語詩です。これはイタリアの物語の翻案であり、さらに原案は遡れるのですが、このバージョンですでにペストについての言及があります。ブルック版でも、やはりペストの隔離で手紙が届かず、二人の恋人は死ぬのです。そうすると、シェイクスピアのオリジナリティはどこにあるのでしょうか。それは、ペストの恐怖が実際の病にあったのか、病の疑いにあったのかという違いです。元ネタのブルック版では、修道士が実際にペスト患者の家に行ったことによって隔離されるのですが、シェイクスピア版では、ペスト患者ではなかったにも関わらず、病人を見舞ったらペスト患者のもとに行ったと疑われて隔離されるのです。この、感染「疑い」の持つ力、恐怖が人を動かす力に対するまなざしは、さすがシェイクスピアといったところです。

この戯曲に登場する次のペスト表象は、ロミオの親友マキューシオの死に際の言葉です。マキューシオはシェイクスピアオリジナルのキャラクターであり、彼の独創性が光る部分でもあります。マキューシオは殺される際、その死に際の言葉で彼はモンタギュー家とキャピュレット家の双方を呪います。その言葉を引用しましょう。

マキューシオ　やられた。
　どっちの家もくたばりやがれ！もうだめだ。

2　ウィリアム・シェイクスピア著，松岡和子訳（1996）『ロミオとジュリエット（ちくま文庫）』筑摩書房. 202.

やつは逃げたのか、無傷でか？

ベンヴォーリオ　おい、やられたのか？

マキューシオ　うん、ああ、かすり傷だ、かすり傷、でもこたえる。
おい、医者を呼んでくれ。

ロミオ　しっかりしろ、大した傷じゃない。

マキューシオ　まあな、井戸ほど深くはない、教会の入り口ほど広くもない。でもこたえる、効くよ。明日、俺に会いにきてみろ、はかなく墓に納まってるよ。一巻の終わりだ。どっちの家もくたばりやがれ！畜生、犬、猫、ネズミがひっかいて人間さまを死に追いやるとはな！ほら吹き、ごろつき、悪党め、一、二の三 と教科書どおりの剣法できやがる。くそ、なんだって割って入ったんだよ？　お前の腕の下から刺されたんだぞ。

ロミオ　為を思ってやったんだ。[3]

この「どっちの家もくたばりやがれ！」という言葉は、原文では“A plague a both houses![4]”（「両家にペストを！」）となっています。この場面で彼はこの表現を 3 回言うのです。そしてこの呪いが成就するかのように、ロミオとジュリエットは命を落とすのです。

また「どっちの家もくたばりやがれ！畜生、犬、猫、ネズミがひっかいて人間さまを死に追いやるとはな！」の部分の原文は次のようになっています。“A plague a both your houses! Zounds, a dog, a rat, a mouse, a cat, to scratch a man to death![5]”この部分には、ペスト菌を保有した動物による傷からの感染のイメージがあります。ここは剣で刺されたときの苦しみの言葉なのですが、その傷の痛みとペストのイメージが交差しているのです。

さて、引用した原文はシェイクスピア自身が手を入れたとされる第二版のテクストに基づくものなのですが、どうやら初演では違う言葉で演じられたらしいことがわかっています。海賊版として出版され、初演の姿を残す初版では、“A pox of your houses”でした。つまり、初演では“plague”（ペスト）を避けて“pox”（天然痘または梅毒）の語が使われたらしいのです。「天然痘」も「梅毒」も凶悪な病ですが、当時、性感染症としての梅毒は揶揄としても用いられたものでした。シェイクスピア自身の意図が反映されているとされる第二版では“plague”の語となっているので、彼は「ペスト」を使いたかったのだと思われます。個人的な解釈としては、その方がリアリティがあると同時に「呪い」のイメージも強いため、彼はそうしたかったのではないでしょうか。しかし、そのリアリティゆえ、初演ではその病の名前を呪いとして使うことはできなかったのだと思われます。

いずれにせよ、もしペストのパンデミックがなければ、ロミオとジュリエットは死ななかったかもしれません。そう考えると、彼らもペスト関連死と言えるのではないでしょうか。またマキューシオの呪いも、ただの慣用句ではなく重みのあるものです。そこに、人間を超えた力による破滅の力としての疫病のリアリティがあったのです。

3　*Ibid*., 113.

4　ウィリアム・シェイクスピア著，安西徹雄，石井正之助編，岩崎宗治編注（1988）『ロミオとジュリエット』大修館書店. 170.

5　*Ibid*.

３．スペイン風邪について

さて、続いてスペイン風邪に話を移しましょう。スペイン風邪とはどんな病であったのでしょうか。スペイン発祥でもなく、「風邪」でもないこの病は現在、「1918年インフルエンザ」などと呼ばれています。しかし今回の講座では、あくまで歴史的用語として「スペイン風邪」の呼称を用いることをご了承お願いします。

スペイン風邪はＡ型インフルエンザ（H1N1亜型）の一種によるパンデミックでした。第一次大戦中に流行開始したこの感染症の第一報告はアメリカだったのですが、戦時中のため検閲され、当時その情報は表に出ることはありませんでした。皮肉なことに中立国だったスペインが情報を出していたため、この病は「スペイン風邪」の名で呼ばれることになったのです。当時の世界人口（18億～19億）の３割近くが感染したこの病は一般的なインフルエンザと違い、働き盛りの25歳～35歳の死亡率が高いものでした。全世界で５億人感染、死亡者数は4,000万（WHO）～１億人以上とも言われています。日本の内務省統計で感染2380万4673人、38万8727人死亡、速水融の統計では内地45.3万人死亡とされています。繰り返しますが、現在の人口に換算すると日本でも100万人前後が死亡したことになります。

現在でこそスペイン風邪の原因がＡ型インフルエンザであったことがわかっていますが、当時は原因が分かっていませんでした。インフルエンザのウイルスの発見が1933年であり、当時は謎の病だったのです。第一次大戦で戦場に放置された死者の遺体から発生した病や生物兵器説などが当時囁かれていたのです。

「インフルエンザ」の症状を起こす病原体として、当時分かっていたものは19世紀末にリヒャルト・ファイファー（および北里柴三郎）が発見した「インフルエンザ桿菌」（通称「ファイファー桿菌」）だけでした。これは現在HIBと呼ばれているもので、通常のウイルス性のインフルエンザとは別の病です。当時ウイルスが発見されていなかったため、当時の医学者はこのHIBのワクチンを作るのが精いっぱいでした。病気の原因が異なっていたためか、当時の「スペイン風邪ワクチン」は効かなかったようです。

スペイン風邪を治すために多くの人々が用いたものにキニーネ（マラリアの特効薬）がありましたが、効果があったかは不明です。アイルランドの場合、薬として最も用いられたものはウイスキーでした。また社会不安の世の常か、当時も多くの怪しげな薬や民間療法、加持祈祷が流行したのでした。

スペイン風邪の流行は新型コロナウイルスと違い、短いものでした。英国やアイルランドの場合第一波は1918年夏（感染力・高、死亡率・低）、第二波は1918年秋～冬（感染力・低、死亡率・高）であり、第三波を1919年春に迎えて収束しました。日本の場合は「前流行」として1918年に第一波を迎え、「後流行」として1920年に第二波を迎えました。このスペイン風邪により、いわゆるパンデミックの風景が誕生しました。マスク、手洗い、消毒の推奨、人混みの回避や風邪様症状時の外出自粛、学校の休校、興行の中止、ワクチンの是非についての論争などです。

この病に多くの有名人が感染しました。日本首相である原敬、スペイン国王アルフォンソ13世、イギリス首相ロイド・ジョージ、アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソン、アメリカ海軍次官（後大

統領）フランクリン・ルーズヴェルトなどを始め、ウォルト・ディズニーやマハトマ・ガンディー、フランツ・カフカなどが感染しました。エドヴァルド・ムンクは「スペイン風邪に罹患した自画像」を残しましたし、ギヨーム・アポリネールは一家揃って命を落としました。その他イギリスの作家ではT. S. エリオット、ヴァージニア・ウルフ、D. H. ロレンスは感染後に後遺症に苦しみ、コナン・ドイルは息子と弟を失い、心霊主義への傾向を強めました。

その他にも芥川龍之介や斎藤茂吉、与謝野晶子、などなど…このような著名人の感染者リストは挙げればきりがありませんが、注目すべきなのは後遺症を訴える記述が多いことです。先に挙げたウルフの代表作『ダロウェイ夫人』の主人公も、スペイン風邪の後遺症に苦しむ女性です。また同時期に「嗜眠性脳炎（エコノモ脳炎）」という奇妙な病が流行し、後遺症の一種として扱われたりもしましたが、関連性は不明です。そのような後遺症は第一世界大戦の戦争神経症（シェルショック）と同じくらい社会に影響を与えたはずですが、しかしそれでも世界はこの病を忘れていました。人類は病を忘れやすいものとはいえ、なぜこのような状況になってしまっているのでしょうか。

なぜスペイン風邪が忘れられていたか、このことを最初に問い直したのがアルフレッド・W・クロスビーです。彼はアメリカの事例を分析しましたが、その結論は以下です。１つ目の理由は、人々の関心が第一次大戦の方に向いていたことです。この病は戦争より多くの死者を出しましたが、戦争の一部として扱われていたのです。２つ目の理由は、多くの人が感染した一方で、死亡率が高かったわけではないということです。結果として多くの命を奪ったのですが、皆が亡くなったわけではありません。そのため、罹っても治る病であるという体験を多くの人が共有することになってしまったのです。また症状が風邪と似ている部分があったため、風邪ではないが「風邪」扱いされてしまったことも大きいと言えるでしょう。これは新型コロナウイルス感染症とも共通している要素です。３つ目の理由は、流行が約１～２年と短期間で終わったことです。４つ目の理由としてクロスビーは著名人の命を奪わなかったことを挙げていますが、これはそうとも言えないのではないかと思われます。

では日本の場合はどうでしょうか。速水融はクロスビーの挙げた理由に加えて、次の理由を挙げています。１つ目は大正時代中期という日本史上の転換期であったことです。当時は大正デモクラシーおよび急速な工業化の時代であり。国際的に見れば当時の日本は戦勝国かつ列強の一員となるなど、世の中が急速に変わりつつある時でした。２つ目の理由は、この病の流行後まもなく関東大震災が東京を襲い、その後も昭和期の戦争の時代が続いたことが挙げられています。

一方、これから見ていくアイルランドの場合はどうでしょうか。イダ・ミルンの分析では、クロスビーの挙げた理由に加えて、アイルランドの独立期の激動の時代であったことが一番の理由として挙げられています。第一次大戦終結直前からこの病は流行したのですが、パンデミック中の1919年に独立戦争が勃発、南はアイルランド自由国として独立しましたが、北アイルランドは英国の一部として留まり、南では内戦が勃発します。そのような混乱した時代において、病は記憶されづらかったということです。２番目の理由は、貧困国であったアイルランドでは、もともと病気による死亡率が高かったことです。病に罹りやすく、罹れば命を落とすのが日常だった当時のアイルランドにおいて、新たな病がそこに加わったとしても、それは記憶されづらかったのでしょう。そして３つ目の理由が、アイルランドにおいて第一次世界大戦について論じることがタブー視されていたためです。当時

英国領だったアイルランドでは英国軍に従軍する若者は多く、必ずしも否定的に見られていたわけではありませんでした。しかしアイルランド自由国の独立後は、英国軍に従軍したことは裏切り行為として否定的に見られるようになりました。デクラン・カイバードによれば、15万人のアイルランド人英国兵の記録が消されていたということです。また近年まで第一次大戦の戦没者の慰霊を行うのは難しかったのです。第一次大戦の死者がそのように忘却されるのなら、そこに含まれることもあるスペイン風邪の死者を忘却するのも不思議なことではないでしょう。

このようなスペイン風邪の忘却の指摘は、文学研究にも新たな視座をもたらしています。第一次大戦後に起こった前衛文学運動をモダニズム文学と言い、既存の価値観が破壊された時代に新たな表現を模索しました。このモダニズム文学とスペイン風邪の関係を2019年にエリザベス・アウトカが指摘したのです。モダニズム文学の独自要素のすべてがスペイン風邪のせいだと言い切るのは乱暴ですが、第一次大戦の影響は論じながらそれ以上の死者を出した疫病に触れないのは確かに不十分だったのは確かでしょう。本講演では、モダニズム文学の代表作の１つでもあるW. B. イェイツの詩「再臨」と、それが構想された時期、スペイン風邪パンデミック下のダブリンを舞台にした現代小説、エマ・ドナヒュー『星のせいにして』を見ていくことにします。

４．W. B. イェイツ「再臨」

W. B. イェイツは1923年にノーベル文学賞を受賞したアイルランドの詩人、劇作家であり、アイルランドの文化的独立を目指した「アイルランド文芸復興運動」のリーダーです。アイルランド自由国独立後は上院議員も務め、「20世紀における英語圏の最大の詩人のひとり」（T. S. エリオット）、「イェイツが国を発明し、それをアイルランドと呼んだ」（デニス・ドナヒュー）などと讃えられる人物です。なお、そのイェイツが死ぬ間際のイェイツが校正した最終版の詩集*The Poems of W. B. Yeats*（サイン入り350部限定出版）が城西大学水田記念図書館に所蔵されています。これは大変貴重なもので、日本の大学では城西大学と実践女子大学の２校しか所蔵していません（しかも城西大学のものは非売品ナンバー（366）です）。本講演では貴重なこの詩集を用いて朗読をさせていただきます（注：貴重書なので、図書館でも通常は貸出できません）。

今回扱うイェイツの詩は「再臨」というものです。「再臨」とは『ヨハネの黙示録』などに記されたキリスト教の信仰です。この世の終わりにキリストが天から再臨し、この世を消し去り、生者と死者を裁く、というものです。その再臨の兆しとして、戦争や疫病、天災など、いわゆる黙示録の災いが起こる、とされています。イェイツの「再臨」とは、キリストではなく反キリストたる荒々しい野獣が生まれるということ、現在の文明とは逆の文明が生まれるということです。キリスト教における「再臨」が天からのもの、地上を超越したものであるのに対して、イェイツの「再臨」は天から来るのではなく「生まれる」というものです。その反キリストがどうやらキリストが生まれたベツレヘムで生まれるように思われるというその書きぶりは、当時の不安に満ちた世相を反映していると解釈されてきました。特に多いのが、ファシズムの誕生の予感であるという解釈です。

さて、同時期のヨーロッパに目を向けてみましょう。1917年に始まったロシア革命は世界初の共産主義国家を建国し、1918年のドイツ革命は第一次大戦の終結を早めました。その後1919年にはド

イツで共産主義者のスパルタクス団が蜂起し、1922年にはロシア内戦が勃発、日本もシベリア出兵を行いました。同年にはイタリアでムッソリーニがローマ進軍を行いファシスト党の政権を樹立、翌年にはドイツでヒトラーがミュンヘン一揆を起こします。共産主義かファシズムか、二極化しつつ混迷を深めゆく世界でした。この詩はそのような社会不安を捉えたものとされてきたのです。水田記念図書館所蔵の1949年版イェイツ詩集で朗読し、その後高松雄一の訳で引用してみましょう（和訳のみ掲載します）。

しだいに広がりゆく渦に乗って鷹は
旋回を繰り返す。鷹匠の声はもう届かない。
すべてが解体し、中心は自らを保つことができず、
まったくの無秩序が解き放たれて世界を襲う。
血に混濁した潮が解き放たれ、いたるところで
無垢の典礼が水に呑まれる。
最良の者たちがあらゆる信念を見失い、最悪の者らは
強烈な情熱に満ち満ちている。

たしかに何かの啓示が迫っている。
たしかに《再臨》が近づいている。
《再臨》！ その言葉が口を洩れるや
《世界霊魂》から出現した巨大な像が
私の視界を掻き乱す。どこか沙漠の砂の中で
ライオンの胴体と、人間の頭と、
空ろな、太陽のように無慈悲な目をしたものが
のっそりと太腿を動かしている。まわりに
怒り狂う沙漠の鳥どもの影がよろめく
ふたたび暗黒がすべてを閉す。だが、今、私は知った、
二千年つづいた石の眠りが
揺り籠にゆすられて眠りを乱され、悪夢にうなされたのを。
やっとおのれの生れるべき時が来て、ベツレヘムへ向い。
のっそりと歩みはじめたのはどんな野獣だ？[6]

イェイツの個人神話ではこの世のすべてを二重らせん「ガイアー」で表現するのですが、この詩では「始原性のガイアー」（民主主義的・キリスト教）が衰え、「対抗性のガイアー」（貴族主義的・ギリシア的）が力を増す時代、反キリストとしての荒々しい獣が、知性の象徴たるスフィンクスの装いで現れようとしています。これは大衆的でない、キリスト教的でない、古代ギリシアやローマのよう

6　ウィリアム・バトラー・イェイツ著，高松雄一訳（2009）『対訳イェイツ詩集（岩波文庫）』岩波書店. 148－49.

な偉人の知性で導かれる文明の到来を象徴しています。悪魔的・野獣的ともいえる「超人」が暴力も用いながらも強力に国をまとめ導いていくというヴィジョン、それは実際、ファシズムとして具現化されていくことになったのでした。

草稿などを見ても、おそらくそれは正しい解釈だと思われます。しかし、時代背景と照らし合わせてこの詩を解釈するとしても、世界的な大事件が見落とされている、そういった指摘が2019年にアウトカによってなされました。つまり、スペイン風邪の影響です。パトリシア・マーシュの推計によれば、スペイン風邪はアイルランドで32917人の死者（当時人口約400万人）を出しました。これは独立戦争と内戦の死者を合わせたものよりずっと多いものです。貧富を問わずウイルスは襲いましたが、特に劣悪なスラムや繊維工場などで感染拡大しました。第一次大戦の戦勝パレードや、工場と村を往復する繊維産業がその感染を広げました。さて、この詩にスペイン風邪の影響があったというのなら、作者イェイツとスペイン風邪はどのような関係にあったのでしょうか。

イェイツ自身はスペイン風邪に罹患しませんでした。しかし、彼はアベイ座という劇場の経営者の一人でした。今回の新型コロナウイルス感染症のように、スペイン風邪のパンデミックは劇場ビジネスを襲いました。ダブリン市は劇場の閉鎖を要請したのですが、同市の劇場は一日２回消毒を行うことと、子どもの入場を規制することにより、上演を継続したようです。アベイ座の具体的な対応について資料がないか調査中なのですが、独立戦争や内戦時でも上演を継続した劇場ですので、おそらく同様の対応だったと思われます。だとしても、経済的にも精神的にもこたえるものだったでしょう。

また1918年11月、父ジョン（当時79歳）がニューヨークで危篤と電報が入ります。彼の妹がニューヨークへ向かいました。病院嫌いのジョンは入院を拒否し、やむなく個人看護師をつけて対応したそうです。直後妻ジョージ（当時27歳：妊娠中）が感染し危篤となります。これはかなり危機的状況となり、その状態は一か月以上続きました。こちらも個人看護師をつけ、24時間個人看護を行うことになりました。先に触れましたように、スペイン風邪の特徴は25歳〜35歳の致死率が高いというものです。加えて妊婦の場合、合併症の発生率が約50％増すというデータもあります。父も妻も最終的には命を取り留めたものの、イェイツは恐ろしい思いを味わったことでしょう。

そしてそんな中、かつての想い人が来訪するという一幕もありました。1918年、英国治安当局はドイツと陰謀を企てたという疑惑（捏造だったことが明らかになっています）でアイルランド独立運動家150名を逮捕しました。そこにイェイツのかつての想い人であるモード・ゴンもいました。彼女は逮捕・拘留され、アイルランド上陸禁止命令が出されます。しかし彼女は脱走し、赤十字の看護婦（歴史用語として「看護婦」の訳を用います）に変装してアイルランドに上陸、イェイツの家（もとはモードの家でした）に助けを求めました。かつての想い人の来訪ゆえ、彼女の頼みに弱かったかつてのイェイツなら扉を開けたかもしれません。しかし今は妻が危機的状況にあり、もしモードを家に入れれば警官が来るかもしれません。そのため彼は拒否し、扉を挟んで口論になりました。このエピソードゆえ、彼は後に民族主義者から愛国的でないと批判されることにもなりました。（一方、モードも肺炎の症状があったとのことなので、彼女もひょっとしたらスペイン風邪に感染していたかもしれません。）

さて、詩「再臨」には「血潮」と「おぼれ死ぬ」というイメージがあります。印象的なイメージなのですが、ここにスペイン風邪の記憶があるとアウトカは指摘しました。スペイン風邪で多い症状は

肺からの出血でした。それはなんと、吐血で窒息するほどだったのです。スミソニアン博物館には、穴だらけになったスペイン風邪の犠牲者の肺が残されています。またこの詩では差し迫る出産とその不安のイメージが描かれています。そう考えると、妻の感染と出産の経験が創作の裏にあるのではないか、と推測することも可能です。この詩は『マイケル・ロバーツと踊り子たち』という詩集に収録されています。イェイツの作品において、詩集の中の配列というのは非常に重要なのですが、この詩は（“That crafty demon and that loud beast / That plague me day and night[7]”）という、病のイメージがある詩行から始まる詩「悪魔と獣」の後に続き、暴風が吹き荒れる中で娘の将来に思いを馳せる詩「我が娘への祈り」の前に置かれています。このことから考えても、この詩「再臨」の背景に病と出産のイメージがあるというのは的外れではないと思われます。

さてここで「予言獣」に目を向けてみましょう。日本では件（くだん）、アマビエ、神社姫などが知られています。これらは疫病や戦乱を予言して死にますが、姿を描き持てば助かるといいます。これら「予言獣」は、意識的に民衆が噂を広める道具として、社会不安で儲ける道具として使われたこともありますが、声にならない不安の具現化として現れたという側面も否定できないでしょう。それら日本の「予言獣」だけでなく、イェイツの「再臨」の獣も、啓示を告げる異形の存在です。それは病を目の当たりにした人間の想像力が産み出したもの、病の記憶を伝えるものかもしれません。

5．エマ・ドナヒュー『星のせいにして』

それでは最後に、「再臨」のちょうど百年後に書かれ、出版された現代小説を見てみましょう。1918年のアイルランドにおけるスペイン風邪パンデミックを舞台背景とした小説、『星のせいにして』（原題：*The Pull of the Stars*）です。作者はエマ・ドナヒュー、アイルランド文学者デニス・ドナヒューの娘で学者・作家です。アイルランド生まれアイルランド育ちですが、現在はカナダで同性のパートナーと暮らしています。この本の日本語版の宣伝文を見てみましょう。「スペイン風邪が猛威を振るう、1918年、ダブリン。小さな産婦人科病室で、彼女たちは“生命”のために闘い続けた」「匂い、汚れ、暴力、差別、繰り返される死の感触。この小説は、今を生きる私たち看護師そのものだ」。さて、この本はどんな話なのでしょうか。

舞台は1918年10月31日～11月２日の３日間、第一次大戦中、のスペイン風邪パンデミックの最中のダブリンにある病院の＜産科／発熱＞病棟です。戦争で物資がない、人員もいない、治療法もないという極限状態の話です。その極限状態の中、様々な矛盾が露わになり、様々な差別（女性、未婚／非婚、孤児、など）が複合的に折り重なる様が描き出されます。また極限状態における女性たちの絆も描かれます。

主な登場人物を紹介しましょう。主人公はジュリア・パワーズという29歳（作中で30歳の誕生日を迎える）職業看護婦（歴史用語として、訳書も「看護婦」「職業看護婦」を用いています。戦争中はVADと呼ばれるボランティア看護婦も多くいました）です。戦争から帰って来た弟ティムと二人

7　Yeats, William Butler (1966). Peter Allt and Russell K. Alspach. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. New York: Macmillan. 399.

暮らしで、その弟ティムは戦争神経症で声が出せない状態にあります。病院自体には看護婦長や他の看護婦、シスターなどもいたのですが、スペイン風邪や戦争のために彼女一人が＜産科／発熱＞病棟を任されることになりました。孤軍奮闘する彼女のもとに教会から一人の助手が送られてきました。その女性はブライディ・スウィーニー。青白い、そばかす顔の赤毛の彼女は22歳「くらい」ですが、孤児なので正確な年齢が分かりません。幼い頃から教会の施設で虐待され続けてきた女性で、現在もその軛から逃れることができずにいました。そこに加わった力強い味方がキャスリーン・リン医師です。この小説において、彼女のみ実在の人物です。史実としてアイルランド国内で医学教育を終えた最初の女性医師で女性参政権運動家、アイルランド独立運動家です。独立のための1916年復活祭蜂起で医官・大尉を務めただけでなく、スペイン風邪の治療活動に関わり、翌年にアイルランド初の小児科およびインフルエンザ病院を開設したことでも有名な人物です。また女性パートナーであるマグダレーン・フレンチ＝アレンと共に暮らしたレズビアンとしても知られています。この３人を中心として物語は進みます。

この小説の章立ては、「赤」「茶」「青」「黒」となっています。これはスペイン風邪の症状の悪化の様子として知られていたスケールです。つまり、物語の最後に「黒」の悲劇が待っていることを暗示してもいるのです。

主な患者たちは次の４人です。＜産科／発熱＞病棟なので、全員スペイン風邪に罹患して重症となっている妊婦たちです。まずはデリア・ギャレット。彼女は裕福なプロテスタントです。続いてイタ・ヌーナン33歳。７人の子供の母（11回出産、７人存命）です。片足が不自由で、TNT火薬工場で働いています。夫はロックアウトで無職となり、軍隊に志願するも断られ、街で手回しオルガンを演奏している人物です。せん妄が激しく、ジュリアは対応に苦労します。そしてメアリー・オーラヒリー17歳。性に関する知識に乏しい人物です。そして最後がオナー・ホワイト29歳。信心深いカトリックの禁酒主義者です。

ジュリアは物語の開始前にも何人も何人も患者たちを看取ってきました。そして患者が命を落とすごとに、身に着けている懐中時計に傷をつけていきます。母親が亡くなったら丸い満月、赤ちゃんが亡くなったら三日月。「死んで生まれてきた子たちの分」は「流産の子たちも、もし日数が進んでいて、男の子か女の子か分かる時は[8]」、線を刻んでいくのです。

とある患者が亡くなった際、彼女は次のように考えました。長い引用となりますが、患者たちがどんな環境に置かれていたか、象徴的な箇所ですので、引用させてください。またこの小説では引用符がありません。

> 規定の小さな文字で両側びっしり埋められている彼女の記録の終わりを、もしも私が書くことができたなら、骨の髄まで疲労、と書いただろう。二十四歳にして五児の母親。何世代にも渡り飢餓に苦しんだ先祖を持つ痩せっぽちの娘。紙のように白い肌、充血した赤い瞳、ぺったんこの胸、ずきずきする古傷、小枝みたいな手足に、蔓のように絡みつく青い血管。アイリーン・ディヴァイン［注：冒頭部で亡くなる患者］は物心ついた時からずっと崖っぷ

8　エマ・ドナヒュー著，吉田育未訳（2021）『星のせいにして』河出書房新社. 296.

ちを歩いてきた。インフルエンザは彼女をちょいと指先で押しただけ。

いつだって休むことなく、なんとか切り詰めてダブリンの母親たちは旦那や子どものために食べ物を用意し、自分たちは食べ残しをかき集め、大量の水で薄めた紅茶をがぶ飲みして生き延びている。彼女たちがどうにか暮らすスラムは、私から見たら脈拍や呼吸数と同じくらいカルテに記入するべきものなのに、書いていいのは医学的観察の記録だけ。だから〈貧困〉と書く代わりに、〈栄養失調〉と〈衰弱〉と記す。〈妊娠回数過多〉を示すための暗号は次の通り。〈鉄分不足〉、〈動悸〉、〈背中の痛み〉、〈骨粗しょう症〉、〈失禁〉、〈静脈瘤〉、〈うつ〉、〈瘻孔〉、〈子宮頸管裂傷〉、〈子宮脱〉。[9]

ここには幾世代にもわたる社会的弱者の姿と、その弱者への最後の一押しとしての感染症があります。スペイン風邪がなくても彼女たちの命は長くはなかったかもしれません。ですが、ぎりぎりで生きている彼女たちの命を奪ったのは、やはり感染症だったのです。

そして別の貧しい患者であるイタ・ヌーナンは出産中に子どもともに死亡します。このように病は社会的弱者を追い詰めがちですが、そうでなくても病は容赦してくれません。裕福なプロテスタントの患者デリア・ギャレットの出産は死産となります。禁酒主義者のオナー・ホワイトは出産中に危険な状態となり、主人公ジュリアが緊急輸血をします。その結果、男児（口唇裂傷あり）を出産しますが、間もなく死亡します。また性的知識のない17歳のメアリー・オーラヒリーは女児を出産します。４人の妊婦のうち、母子ともに無事なのは彼女だけでした。

そこはまさに戦場でした。命が失われる戦場ではあるものの、命が産み出される戦場でもありました。第一次大戦の最中で物資も人員もなく、治療法も薬もない極限状態の中で、彼女たちの絆は深まっていきます。ジュリアとブライディはお互いに恋心を抱くようになり、夜中に病院の屋上で星を見ながら語り合い、キスをします。星空の下のロマンチックな空気の中、語り合ったことのひとつは、インフルエンザという語の語源についてでした。

見上げるとおおぐま座が目に入った。彼女に教える。

イタリアではね、病気は全部、星たちから受ける影響のせいだと思われていた――だから、インフルエンザって呼ばれてるんだって。[10]

タイトルはここから来ています。原題*The Pull of the Stars*（星がひっぱること）を『星のせいにして』と訳したのは名訳だと思います。

そして病にかかった人を非国民のように非難する広告について、ジュリアは次のように心の中でつぶやきます。

ばい菌のせいにして、埋葬されない死体のせいにして、戦争の土煙のせいにでも、気まぐれ

9　*Ibid*., 32.

10　*Ibid*., 294.

> な天気や風向きのせいにでも、万能な神のせいにでもすればいい。そうだ、星々を責めればいい。だけど、死んだ人たちを責めるのはやめて。だって、望んでそうなった人なんて、いないんだから。[11]

病になったことを自己責任にはしたくない。だからその他のものにしてしまえばいい、とジュリアは思います。自己責任論の回避として「星のせいに」してしまおう、と。しかし、もし病やその他の不幸を星のせいにするのなら、それは運命論に陥ってしまうことにもなります。

> 私たちが生まれたその日に、それぞれの将来がもう決められているなんて、私は今まで信じたことがない。星々が何かを教えてくれるならば、その点々は私たちがつなぎ、私たちが生きることで、運命が描き出されていく。
>
> でも、ギャレット夫人の赤ちゃんは、死んだまま生まれ、他にもたくさんの命の物語が、始まる前に終わってしまった。そして、生まれてきても、長い悪夢の中に生きる人もいる。ブライディやホワイト夫人の赤ちゃんのように――そんなこと、誰が命令できるのだろう。命令せずとも、そんな物語を許してしまえるのは誰？[12]

それは神様のような星の導きでしょうか。勝手に人間の運命を操り、生き死にを定めることが神様の御業でしょうか。神がいるというのなら、なぜそのような不平等があるのでしょうか？ジュリアはカトリック教徒ですが、そのようなことを思います。

そのような疑問を抱きながらも、やはり人間にどうしようもできないことは、やはりあるのでした。原因が当時まだ分からず、特効薬もなかったスペイン風邪もその一つでした。そのような場合は、「星のせいにして」やれることをやるしかないのかもしれません。

さて、先に触れたようにこの小説の章はスペイン風邪の進行度合いを表す顔色「赤」「茶」「青」「黒」となっています。星空の下のジュリアとブライディのロマンチックな会話の後、物語は暗い結末へ向かって行くのです。ジュリアが輸血をした患者オナー・ホワイトの容体が悪化し、急死します。そして子どもの命も長くないかもしれません。そこでジュリアは緊急洗礼を行うことを決意します。カトリックの信仰において、洗礼を受けずに亡くなることは恐ろしいことでした。そこで、亡くなる前にせめても、ということで、司祭でない信徒が緊急洗礼を行うことは、嬰児の死亡率が高かったアイルランドでは珍しくありませんでした。

ジュリアが輸血した母親から生まれた子です。ジュリアと、その恋人であるブライディが共に名親として、その子に緊急洗礼を行います。口唇裂傷を意味するアイルランド語（ゲール語）を基にして、聖書よりバルナバス（慰めの子、の意）と名付けます。その儀式はまるで、新たな家族を作り出す儀式のようでした。

直後、ブライディが急に倒れます。彼女は病室でスペイン風邪に感染していたのでした。スペイン

11　*Ibid*., 317-18.

12　*Ibid*., 301.

風邪に一度罹患して快癒し、免疫を持っていることを条件として病棟でノーマスクでいたのですが、彼女は嘘をついて働いていたのでした。その理由は、「ジュリアを助けたかったから」、だったのです。他の誰でもない、ジュリアを。その想いが彼女の命を奪うことになってしまったのです。ブライディはジュリアの腕の中で息を引き取りました。

また悪いことに、リン医師が反逆者として逮捕されます。これは実はおおよそ史実通りとなります。史実では、反逆者だとしてもスペイン風邪の治療のために必要だということでダブリン市が介入して釈放され、新たな病院を開設することになるのですが、そこまではこの小説では描かれません。

ジュリアは、ブライディの亡骸に多くの虐待の傷を見つけました。彼女は教会でひどい虐待を受けてきたのです。その一部は星空の下でジュリアに語られましたが、実際はもっとひどいものでした。（このあたりは、アイルランドのカトリック教会で1990年代以降明らかになったマグダレン修道院／洗濯所や性的虐待のことなどが筆者の心にあったのではないかと思われます。）そこで彼女の心によぎったのは、生まれたばかりのバルナバスのことでした。親を失った彼はブライディのように教会の孤児院で育てられることになるでしょう。しかし、そうなると同じように虐待されるかもしれないという不安がジュリアの胸によぎりました。そして彼女は大胆な決断をするのです。ジュリアはその子を自分の子として引き取り育てるというのです。輸血をした人物から生まれた子として、そして、最愛のブライディとの間の子として育てるという決意でした。病院側、および教会側は次のように警告します。喋れない弟との間の子、と呼ばれるかもしれないよ、というのです。ジュリアはそのような脅しを無視し、病院を辞め、その子を抱いて街の闇の中へ歩いていくのです。病院は、彼女が傷だらけになりながらも尽くしてきた場でした。しかし、彼女はそのような道を選んだのです。彼女とその幼子はその後どうやって生きていくのでしょうか。この小説の最終行は、次のようになっています。「そうして私は彼を抱えて、世界の終わりのような通りを進んでいく[13]（原文“So I carried him along through streets that looked like the end of the world[14] ”）」。闇の中を進んでいく、闇の中でも歩いていくのです。原文は“carried him along”。ここには確かに命の重みがあります。闇の中に消えていく、のでは決してないのでした。

6．まとめ

人は冒険を語りたがるものですが、病を語りたがらないものです。そのためか、病を中心的なテーマとした作品は多くはありません。しかし「生病老死」、病も人間の宿命、人間の一部とも言えるものです。人は病を忘れやすく、病についての記述は抜け落ちやすいものですが、記憶や記録から抜け落ちても、文学作品の表面に見えなくなっても、深層に残っていることもあるのです。また、後の時代の人がその声をくみ取り、新たな文学作品にすることもあるのです。文学だからこそ『ロミオとジュリエット』のように、病の直接の被害者ではない間接的な犠牲者を扱うことができます。また「再臨」のように、うまく言葉にできないイメージとして病の記憶を扱うことができます。『星のせいに

13　*Ibid*., 362.

14　Donoghue, Emma (2020). *The Pull of the Stars.* New York: Picador. 291.

して』のように、時代を隔てて病を取り上げ現代的なものとして扱うことができます。「見えないもの」を扱う文学だからこそ、記録に残らない感情や、記憶から抜け落ちたものを伝えることができ、また時代を超えて、テーマとして蘇らせることもできます。それが、病から逃れられない人間が手にした「文学」というものなのではないでしょうか。

（本稿は2022年度城西大学公開講座「ポストコロナ時代を生き抜くために」講演「英国・アイルランド文学とパンデミック：ペストとスペイン風邪を中心に」に加筆修正を行ったものである）

参考文献

Crosby, Alfred Alfred Worcester (2003). *America's Forgotten Pandemic: The Influenza of 1918*, Cambridge: Cambridge UP. アルフレッド・W・クロスビー著（西村秀一訳・解説）（2020）『史上最悪のインフルエンザ：忘れられたパンデミック（新装版）』みすず書房.

ダニエル・デフォー著（武田将明訳）（2017）『ペストの記憶（英国十八世紀文学叢書）』研究社.

Donoghue, Emma (2020). *The Pull of the Stars.* New York: Picador.

－－－. エマ・ドナヒュー（吉田育未訳）（2021）『星のせいにして』河出書房新社.

国立感染症研究所（2006）「インフルエンザ・パンデミックに関するQ＆A」国立感染症研究所.

国立感染症研究所（2019）「ペストとは」国立感染症研究所.

速水融（2006）『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ：人類とウイルスの第一次世界戦争』藤原書店.

石塚久郎監修（2021）『疫病短編小説集』平凡社.

Marsh, Patricia (2021). *The Spanish Flu in Ireland: A Socio-Economic Shock to Ireland, 1918-1919.* New York: Palgrave.

道行千枝（2022）「シェイクスピアと疫病再考：『ロミオとジュリエット』と『アテネのタイモン』を比較して」『福岡女学院大学紀要人文学部編』32号. 1－28.

Milne, Ida (2018). *Stacking the Coffins: Influenza, War and Revolution in Ireland, 1918-19.* Manchester: Manchester UP.

永江朗編（2021）『文豪と感染症：100年前のスペイン風邪はどう書かれたのか』朝日新聞出版.

Outka, Elizabeth (2019). *Viral Modernism: The Influenza Pandemic and Interwar Literature.* New York: Columbia UP.

ウィリアム・シェイクスピア著（安西徹雄，石井正之助編，岩崎宗治編注）（1988）『ロミオとジュリエット』大修館書店.

－－－ 著（松岡和子訳）（1996）『ロミオとジュリエット（ちくま文庫）』筑摩書房.

Spinney, Laura (2017). *Pale Rider: The Spanish Flu of 1918 and How It Changed the World.* London: Vintage.

高橋敏（2020）『江戸のコレラ騒動（角川ソフィア文庫）』角川書店.

鶴田学（2022）「感染症の時代に読み直す『ロミオとジュリエット』」『英文学研究（支部統合号）』14. 231－239.

内海孝（2016）『感染症の近代史（日本史リブレット）』山川出版社.

ヴァージニア・ウルフ著（川本静子編訳）（2020）『病むことについて（新装版）』みすず書房.

ウィリアム・バトラー・イェイツ著（高松雄一訳）（2009）『対訳イェイツ詩集（岩波文庫）』岩波書店.

Yeats, William Butler (1949). *The Poems of W. B. Yeats.* 2vols. London: Macmillan.

--- (1966). Peter Allt and Russell K. Alspach. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats.* New York: Macmillan.